

実務現場の原体験

— 板橋区公文書館 —

元公文書館専門員・現芳賀町総合情報館 富田 健司

在籍期間 (2002.6 ~ 2005.3)

原稿依頼を頂戴した時、—10年!—もうそんなに月日が経っているのか、と改めて驚嘆した。私は、平成14年6月から平成17年3月までの約3年間、公文書館専門員として板橋区公文書館に勤務した。勤務当初は開館3年目、初期の助走期間も終わり運営が軌道に乗ろうとしていた頃で、場所も板橋区産文ホール（現、板橋区立グリーンホール）の7階にあった。そして、ここから私の現場経験がスタートした。2年間は大学院に在籍しながら勤務していたが、大学の学部時代からアーカイブズに関心を抱き、早く現場に出たいという強い願望もあって運よく同館での職を得ることができた。

最初の半年間ほどを過ごした産文ホールでは、来館者も非常に少なく、近隣の大山商店街の賑わいをよそに比較的静かな空間で日常業務を送っていたと記憶している。そして、在職中最大のイベントといえば、平成14年初冬に行なわれた公文書館の移転作業であろう。旧区立板橋第三小学校を活用して、ボランティアセンターなどと共に公文書館が複合施設の一部を占めた。最近では、自治体財政の悪化によって学校や庁舎といった既存施設を公文書館に転用するケースも増え始めている。だが、7年前当時はまだ珍しく、保存環境などの点で学校施設が耐えうるものなのか、多少の疑問もあったが、今考えてみると学校を活用した公文書館の先見的事例になったと思われる。

私は、現在、栃木県芳賀町において芳賀町総合情報館の運営に携わっている。板橋区公文書館の勤務は約3年と短く、主に区史編さん収集資料の整理やレファレンスを担当していたが、現在の業務を構築する上でその当時見聞、経験したことは随所で役に立っている。特に、公文書の移管と整理・公開業務については、同館を目標とする部分も大きい。現用の記録管理が比較的良質であることを前提とし、移管文書を一年度内に選別・整理し、翌年度にはその公開が行なえるというシステムは国内では稀であり、自治体アーカイブズの手本とすべきシステムを垣間見られたことは非常に光栄であった。

そして、本格的な社会経験という点でも、その最初は板橋区公文書館であり、時には利用者対応で失敗することもあったが、それも今ではよい糧になっていると感じている。心優しい職員の方々にも囲まれ、アットホームな空間で過ごした3年間は、私の実務現場の原点である。板橋区公文書館の更なる発展を心から祈念し、了としたい。

消えた年金記録を求めて

元櫻井徳太郎文庫整理担当 丸山茂雄

在籍期間（2003.4～2008.3）

板橋区公文書館が開設して早10年を迎えることに感慨を覚えます。

公文書館には保存年限の経過した重要な文書が保管されていることは勿論のこと、板橋区が発行している刊行物や国、東京都及びその他の機関で発行された板橋区に関連のある刊行物が多数収蔵されています。また、写真や地図なども昭和初期の頃からあります。なかでも住宅地図は様々な方に利用されました。

近年話題になっている問題に、年金記録問題があります。

ある日、40年以上も前に勤めていた会社名を調べに見えた方がおりました。社会保険庁の「ねんきん特別便 年金記録のお知らせ」が届いたが、自分が昔勤めていた記録が載っていないとのこと。社会保険庁に問合せしたところ、会社名が判ればとのことですが、それが判らない。長い期間勤めた会社名なら忘れることもないでしょう。しかし、数ヶ月や1、2年ですと記憶も不確かになってしまいます。わずかな手がかり「都電の停留所が〇〇〇〇という名前であったようだ。」「会社の前は小学校があった様な気がする。」「カメラか望遠鏡のレンズを作っていた。」等々。住所から現在の町名を、あるいは逆に地番変更前の町名を探さなければなりません。住居表示の実施により、今ではなつかしい町名との出会いもあります。鉱工業者一覧の刊行物と照らし合わせ、住宅地図上で該当しそうな会社を探します。そこが記憶と整合するかどうか最大のポイントです。40年以上も前の記憶を基に、場所をつきとめ、会社名が判明することは容易ではありません。近年の住宅地図は航空写真を基に住宅平面地図ができているため、現地との確認がしやすいものです。昔の住宅地図は手書き絵でした。形状・面積が大雑把すぎて現状との比較が困難でした。なんとなく、それらしき会社名が見つけれられた時は、お客さまと一緒に安堵しました。

私も昭和40～42年にかけて2年間稻荷台に住んでいました。地番と住宅地図を手には訪ねましたが、昔の記憶とは大違いでした。駅からの通勤していた道をなぞりながら歩いて、少しずつ思い出すありさまでした。「近くに住んでいた」「勤務先が近くにあった」等、比較的身近にいても記憶とのギャップは大きいものです。「40数年ぶりに板橋区へ来ました」等の方にとっては、大変貌した現在が、違った街に映ったかもしれないとおもいます。

公文書館に多数保存されている貴重な資料が、勉学・研究のうえでも、また充実した生活をエンジョイするためにも、多面的な活用がされることを熱望いたします。

移管文書整理の思い出

元公文書移管担当 坂本 正暢

在籍期間 (2007.4 ~ 2009.3)

私は公文書館に平成19年5月から平成21年3月まで約2年間、再雇用職員として勤務しました。公文書館は、女性職員がいない総勢7名、全員が男ばかりでしたが、雰囲気の良いチームワークのとれた職場でありました。

私の担当の仕事は、移管文書の整理で、私と、もう一人の再雇用職員の方と2人で行いました。

5月中旬に庁内で一斉に行う廃棄文書の搬出に併せ、公文書館への移管文書の受け取りを区役所ロビーで行いました。受け取った公文書はダンボール箱等に入っており、その量の多いことには驚きです。翌日から当館の書庫内で早速、事前に移管するよう依頼した原議が届いているかどうか確認作業を開始します。古い原議を触っていると紙埃が舞うので、マスクを着用しての作業でした。確認の結果をパソコンに入力して、確認作業は約3ヶ月間で終了です。

その後、移管された原議の内容を確認して、登録するかどうか最終選別の作業を行います。選別は「評価選別基準」によって行うのですが、基準には項目だけで具体的な内容の例示がないので、私は、判断がつかない時、登録文書目録を見て類似のケースがあるかどうか調べて処理をしました。我々2人の最終選別の作業終了後、館長等が再度、チェックを行った上で、登録文書として確定します。作業期間は約1ヶ月半。

この作業が終わると、登録文書として確定した原議のホッチキス針を外し、こよりで綴る作業を行います。単純作業ですが、大きな規格のホッチキス針は外れにくい等、一日中、ホッチキス針と格闘していると、指先は痛くなり老眼の眼は疲れる、約1ヶ月間の作業です。

いよいよ、この後、最後の作業として、パソコンにアーカイブボックスの箱番号を入力し、移管文書を中性紙に包んで、アーカイブボックスに箱詰めして完了となります。

このように、毎年、移管作業を円滑に行うことが出来るのは、平成12年4月の公文書館の開館後、職員に対しての研修や「公文書館だより」の発行で、意識啓発を図ったことにより、職員の意識が高くなり、文書管理システムが機能しているからだと思います。

これからも、公文書館の益々の発展を心より願っています。

あっと言う間の5年間！

元公文書移管・櫻井徳太郎文庫整理担当 小野 武彦

在籍期間 (2005.4 ~ 2010.3)

特別区人事交流制度に乗り板橋区に交流異動して10年目、定年に当たっての「再任用希望の意向調査」。ふと省みれば板橋区に来てわずか10年、その間所属は「障害者福祉畑」(9年間)。自分の畑を耕す以外、他畑の耕作状況・収穫物を知る余地が無かった者が、再任用職場を特定するは至難のこと。いきおい記入したのは、ポスト指定をすることなく①窓口業務はできません②庶務事務は苦手です③障害者福祉畑の再任用はカンベン④本庁内勤務はカンベンとする調書を提出し、再任用面接に望みました。面接の際「学校事務」の話が出たこともあって、俺の次の異動先は「学校事務」かなと想定し、そして、「俺にできるかな」「特に人間関係をうまくやっっていけるかな」「5年間もつかな」と、面接終了後モンモンとする日が続いたことを思い出します。

さて、異動内示の日、「板橋区公文書館」と聞いて、一瞬「それ何」「何処に」が第一声。恥ずかしいことに「公文書館」の存在は無論、「内容」に関して一切知識が無く、これからやっっていけるか？頭が白くなったというのは、後にも先にもあの時以外ありません(「文書主任」を努めていたのだから、公文書館を知らないのは怠慢以外何者でもないと言われても、知らなかったことは知らなかった)。

再任用職場(公文書館)での初仕事は、「公文書館移管文書目録」(第2次選別後)を各所属に配送する作業。まず、○印(要移管文書)が付されているシートをゼロックスし、それを各所属別の交換便封筒に封入する作業。そして「うっむうー」がこの仕事に対する初感想(率直なところ「僕の37年間にわたる公務員キャリアをこの仕事にどう生かせばいいのだ」と)。

当時、「文書管理システム」からアウトプットされた「紙ベースの移管目録調書」に、公文書館側で「第二次選別」(○印)を行い、○印を付した「紙ベース調書」をそのまま各所属に「移管依頼」していた。単純に考えると、「文書管理システム」を公文書館で利用する範囲のみを「ダウンロード」すれば、いま行なっている「作業」をパソコン画面上で処理できるのだがな。でも、公文書館に来て「初めての仕事」に対し、「口をだす」勇氣は持ち合わせていません。

ふっと気付いたこと。それは、再任用選考を経て採用された以上「好むと好まざる」と「仕事は仕事」「職に貴賤はないのだ」、そしてこれが新たな「俺の仕事」。

半年も経過すると「俺の仕事」のサイクルも、先輩諸氏の指導のおかげで「移管作業」を順調に行なえるようになりました。がっ！ここでも、紙ベースの「文書目録」を使用(調書欄外に「移管」であれば○印のゴム印、「紛失」であれば×印、「廃棄」であれば廃のゴム印)し、最終的に「保存ボックス」に移管文書類を保管するまで、「紙ベース調書」は公文書館業務を遂行する上では、当然「無くてはならない」ものでした。

「うっむうー」意識が再度胸に湧き上がってきました。何故「ダウンロード」できないのか？と、「ダウンロード」システムを導入するには「1,000千円」以上の経費を必要にするとの答え(つぶやき=現役であれば「サマカン」に乗せられたのに)。疑問を抱きながらも「公文書移管作業」のワンクールを体験・終了したものでした。

二年目、文書選別を「紙ベース調書」で行い、前年と同様手順で「移管」作業をこなしていても、胸の内は「うっむうー」から離れることはありません。また、仕事に慣れてきたのでしょうか、この時期、生来のアバウト性が首をもたげ、如何に作業を楽にやるかの「文句」を先輩に投げかけ、できるだけパソコンを活用した作業の流れにしよう(当時は、紙、ゴム印、赤鉛筆、全盛)。先輩の「歴史ある作業の流れには従うべき」との貴重な意見を伺いつつも、「楽な作業を」を指向し、よく先輩を悩ませたものです(当時の私は、「作業は楽にそして早く済ませ」、それ以外の時間は公文書館の「あるべき姿」について、先輩諸氏・現役が一体となって検討・模索することが必要と強く感じていました)。

幸いにも公文書館常勤職員が「文書管理システム」内「公文書館で必要とするデータのみ」をダウンロードすることに成功し、結果、3年目の移管作業は初手から「パソコン」対応が可能となり、「楽に作業」を行なったことを思い出します(現役はすごい!!)。

公文書館に来て最初に持った感想(俺のキャリアをどう生かす)も、歴代館長の理解よろしく、公文書館の「課題」となす「様々な問題」に対し、再任用職員・現役の分け隔てなく「検討の輪」の中に入れて頂くことで、現役の「情報量・社会認識」を見るにつけ、俺も「陳腐化しないよう頑張る」との思いを抱いたことを覚えています。

最後に先輩面して申し上げることは、公文書館は区政の「クリエイター集団」としての存在価値を高め、区民・区政・又現役職員に「何らかのもの」を発信していくことが「望まれて」いるのではないかと思います。現役・先輩・後輩に恵まれ「楽しく」勤務させていただいたことに感謝します。本当に、短い5年間でした。